



赤江川口の図

(表紙)

鵜戸詣道の記

いま高岡の地頭てふ仰をなむ蒙りてゐぬれば、このあたりは御領・私領あちらこちらと見めぐらまほしく、思ひ立しハとくよりの事なりしか、ことし慶応の三年といふとし弥生のすへの九日といふに出立しは地頭の職務なれば、たけき武士の鎗・つるきなんと手ならせる業、あるハおさなましり読書の事とも見侍らんと、穆佐・倉岡の郷へなん行事あり、いまハあつからすさむからす、は

たさ、^(り脱力)わ事もなければ、こはよき折ふしになんありつらめとこそ、飢肥領内淡島大明神より鵜戸六社大権現・榎原大権現へ詣なむとおもひ立ぬ、けふは晝夜もまたしらくくにおきいて、彼なんこれとものしぬれば、やうく辰の刻になりて出なんと敷台へ踏か、れハ、庭のあたり高岡の囃役・地頭横目なんと立揃ひぬ、穆佐・倉岡の地頭横目も独りつ、来て付添ぬ、かれこれともの語りなんとして門さし出れば、門の両脇へ若きもの、ふの陣笠とりてひかへたり、あないして行も頼もしくそ見えたりける、付添ふ供人は鮫島善兵衛・小宿岩次郎にそありける、しもべ市之丞なるハ、牛の皮もて箱やうに造りたる胸乱てふものを肩へ脊ひて付したかへり、今朝より空かき曇り雨になりぬれと、はや打立し事になんありつれハ、舟に打乗り、寺師ぬしもおなし舟にして、こたひの旅の道つれにはありぬ、棹さしくたれば、風いとあらかに、雨いミしうふり出て、川音いやたかく成りまさりて、

雨もそひ風のかけたるしからみに

くたす小舟の棹もさ、れす

わつか一里の川くたりなれと、あら、かなる風にむかひ

しなれば、おもひしま、舟もす、ます、やうく巳の刻に穆佐へつきぬれと、かく雨降なれハ、鎗・劍なんどの

業ハミる事もかなはて、おさなとの読書と席書をなん

させて拭^(試カ)ぬ、午の刻過る比穆佐の宿りを立出ぬ、二度

ハやつれくの旅なれば、これよりハ供人も独りハかへ

さなんとおもへと、皆す、ミしなれば、きのふより鮫島

と小宿と鬮取して鮫島が供にさたまり居ぬれハ、小宿ハ

これより高岡さしてかへりぬ、行輩ハ皆舟に打のり棹さ

し下れハ、風も猶あら、かに瀬々の岩浪吹立て、雨も篠

つくはかり、いといとふ降りまさりぬ、

けふはよし篠つくはかり降る雨も

あすよりのちハ晴んとそおもふ

なんとして倉岡へ未の刻はかりに着ぬ、こ、も鎗・劍の

業はこのあめ降にては見る事を得す、おさなの読書とも

き、しも事おはりて、庭のあたり見るに、過し如月中の

七日にこし比は盛りなる桜の木々、いまハ青葉の緑りと

替りて、

花盛り見し八日数の程なきに

あを葉となりて春暮行

暮つた高岡より嘸役大迫弥四郎・町足軽村岡嘉太郎し
もべ独り甚助なるものをつれてきぬ、飢肥領内ハ閑ある

所なれば、往来をもてゆかなんと認きぬ、ひらき見れば、

薩州領内高岡越山右源二・旗田久四郎・大沢弓五郎外

二七人、近国大社為参詣差越候条、往来無異儀御通可

被成候、以上、

高岡飯田村庄屋

慶応三卯三月廿八日

山田新六左衛門

諸国

御改所

ミなあらん名もて認たるもおかし、今宵は倉岡の仮屋に

なんやとりぬ、

四月朔日、きのふ夕つけより雨はやミたりけれど、また

暗かりしが、今朝おきいて、見れば、空はまた曇りつれ

と、西風雲を払ひてやうくうすらきはれぬへきけしき

なれば、皆人こよのふうれしかりて辰の刻はかりに打立

ぬ、おのれらも旅の出立はものかるきそよからなんと、

菅笠ひとつおつとり木履はきつ、出つ、

雨降らはぬれもやぬれむけふよりハ

いとしもかるき旅の菅笠

倉岡よりも与頭佐竹次郎左衛門、しもべふたり磯右衛門・直右衛門となん、ミなあはせて十人、仮屋の下より舟に打のりくたれば、去川と綾川と流れ合所あり、これよりしたハ赤江川といふとなん、倉岡ハ此所へ舟改の番所あり、この川むかひは、左り倉岡の地、右りは延岡の地なるか、右りも赤江川を一二町くたれば倉岡の地あり、そより二里はかり下りて、右のかた延岡今江町川のほとりに見ゆ、この町へすめる後藤仲藏といへるハ、いといとふ富のものにて、此所あるしの君へこかねそこはくを奉りて、御用人格になんなりしものおれりと、そよりわつかはかりくたりて、左りへ此御国よりの御手山材木なんと御囲場あり、此所へ寺師ぬしの実兄猪俣ぬし御手山掛見聞役にて勤られぬれば、風呂なんとわかしておかれて夫に入り、はやよき比になんありつと飯とももてなされぬ、程なくこゝを立て、御囲場の下なる御領、宮崎の内上の町を通り舟よりむかひへ涉り、これも宮崎の内中村町を通り飢肥領城ヶ崎町・赤江町を通り御領本郷町へ

しはし休む、此所まへに、左りうとさん・あわしま道と石にゑりつけてありぬ、すへてかゝるものハ道ゆくたよりともなれハ、立よりて左り右りも見れど、ほかにハいかなる事も見えす、表にしるせしまゝなり、通りこし中村町よりこの本郷までは一里三合ときく、そより木崎・島山を通りて千淡ちがくの浜を通り、淡島大明神の社あり、淡島やちぶくの浜のしら浪は

幾重ともなくよせかへるなり

この千淡の浜より淡島のかたへ二町はかりもあらむ、皆岩瀬にて亀の甲をみるかやうにて、そこばくの岩ほの置ひとつくわざとくほめたらんやうに浪もでしたるもあやしくぞ覚ゆ、この涉り潮のたてたらむおりくは、いかめしく浪こして人の歩ミをと、むとなむ、明神へ詣るには涉りて右のかたへ浜辺つたひ一町はかり行は、浜辺へ鳥居ありて、社はむかふに見ゆ、詣て御神体をたづぬれハ彦火火出見尊なりと、社のあたり左り右り万つ小間物なんと、或るハ菓もの、たぐひ、ひと荷ひづ、持つどいて売り人あまたなミ居たり、はた飴売の若き乙女子とも社の下よりこの涉り二町はかりのあわい、こゝかし

こあまた立つどいて、詣デてかへる人々へ数多寄りつき、立ふさかり右り左り袂にすかりて、竹皮に包ミたる竿飴をもて、これを売りなんとて、買ひ給へくんとせむ、袖ふりはなし走出んとすれハ追かけてすかり付、買はずしてハどこまでも付添ひきたるとなん、そハ下部見かけたらむ時の仕業にて、刀さしたるもの、ふと見受たらんには、かれも稍はゞかりもあればにや、かくまでハあらむものかは、おのれらも詣かへるに飴かいたまへとはいひしもあれと、袖にすぎることハせざりき、わがつれあいの内大迫としもべ独りにはとりつきて飴もかいしとなん、老ほれたる女なんどは、そこらこゝらと店をはりて飴うらむ、かいたまへとゆきかふ人々へ居なから呼かくるもあれと、年若き女どもにせはきばかりせめたてられしなれハ、かへり見る人たになきハ蜘蛛の糸屋にもの、か、らんを待しやうにて、あはれ老のかなしさよともおもはれけり、この所より浜辺つたひ二三町行て僅の里あり、これをすきて田面づたひ一里はかりゆけは折生迫町あり、三年あとミな残りのふやけうせたりとて、やうくかりの庵りと見えたり、家かずも多く見へて、やげざりし前

づがたハよきところになんありつらむやうに見ゆ、こなたハ休ミもせて田面づたひはるくゆきて坂道にかゝり、空にゆくこゝちしてのほれは内海峠とぞ、こゝを僅ばかりくだれば峠の茶屋とてひとつの家あり、いまの登りになか／＼くるしくそ覚ゆれば、今宵のやとりもいまは遠からす目くたりに見ゆれば、此所はいとゆるく／＼と休ミて汗もミなくなりてくだらんと、こなたハ内海のむかひに島なんと見へて眺望いはんかたなし、しばし打ながめてあらましの図とりをなんしつ、此所いと年老たるをのこおれり、年をきけハ九十歳とぞ、千次郎といへるよしなれハ名もよしと皆人いへり、遠望鏡を出して見れハ、宿のあるしをはしめ往来の人々珍らしとて望ミ見れり、こなたハ稍時をうつして坂をくたり、僅はかり田面なんと通りて内海の町薩摩屋仙兵衛所へまだ日たかふして着ぬ、沖には釣舟の遠近とかへるさまいはぬかたなし、

夕日さす野島か沖に遠近と

帆かけも見えて帰る釣舟

程のふして鯉釣船数多入りぬ、多く釣りたるよしなれば、皆打つて浜辺へ出見れハ、こへふとりたる鯉あまた浜

へなけいだせり、まづしはしもはやくなん供人にひつさげさせてかへりつ、皆した、に給たりける、むまき事はしたさへも、のんと入りてたとふるにものなしともいわむ、ミきくミかわして今宵のつかれをやすめ、此宿にふせりぬ、

二日、けさとく立なんとあるしのものへ告置たりしに、寅の刻には飯ともと、のへたりとつげしらせける、かくまでにはやく立いづるのおもひもなく、まだねぶたければ、へんじのミして皆打ふせりてそいたりけるが、寅の刻も稍なかばなる比なん、また起しぬれば、今度は皆おきてなむと、これかれして飯どもつかいぬれば、夜もほのくくと明行、空けふも晴わたりぬれば、いとこゝろよくなむ、卯の刻過る比薩摩屋のやどりを立出つ、けふより行先き鵜戸山まで七浦峠越とて七浦七峠のさかしき坂道を越るとなむ、はしめ宿りしかたよりむかひの町へ舟より涉り、僅ばかり浜づたひ行て、そより田面づたひ稍遠く行て坂道にかゝり、ゆけどくはてなく、やうく峠にのほる、これ野坂とふげとなん、七浦峠のはしめ也、此峠山かけて涼しければ、しばしやすらふ、

のほり行あつさもいまハわすれけり

野坂の峯にすそふやま風

此所へ、是より南鶯巢としるせり、南ハ是より行かたにそありける、此所をくだり、鶯巢村入口に小き宮あり、社内に供養木のやうなる大きな柱をたて、書出しには飢肥領四十三ヶ村何々とあり、行かたいそかるれハこゝろをとめて見す、したには寺号なんどしるしてあれば、菩提寺なむどよりかするしたらむやうなり、飢肥領は四十三ヶ村なんありとしられたれば、是なんこゝに記しつ、して此村に入れば番所ありて、鉄炮やうのもの飾りたれと人は独りも見えされは、こは往来持たれどた、に通らむ事かと思ひあたりしに、こゝを過て家ある所へ行か、れば、この関を守る人はその所へゐて守り居たりと見えて、髪結ひをりしか、小櫛打込しまゝに脇差サシとりて、そなた何かた往来をとよびかけたり、嘉太郎なるもの心得たりと往来さし出せは、書写して通しぬ、ことは高岡よりとをる人あまたあれと、独りも往来もどこしはなかりしといひし、此里は皆足軽やうの家ゐのよしにて、皆富そろへるやうなり、家数は拾四五はかりもあ

るならん、此関守りもこの中間もてせるとなり、此所し
ばしやすらひ立出んとするに、倉岡の佐竹なるもの傘の
畳たる頭に橙ひとつを登せて、鶴戸山までは持越さんも

のをといひしなれハ、そハよし、鶴戸山まで落さずして

持登らは武運強かりなんとぞれ事いへは、落て武運尽な
んよりも、さてかゝる業はなさんぞよかりなんとやミぬ、

皆打笑ミつゝ、また坂をはるゝと汗になり拳とれは井肥^(伊比井カ)
峠なり、これをくだりて井肥村の里へいづ、また峠をこ

ゆれとこの名ハ誰へとふへくもあらず谷へくたりぬ、此
谷すそ浜辺までのあわい、田面なんと僅ばかりあり、そ

より鍋越へかゝり峠へ登れは、此あたりなだらかにして
松かけおふくいとすゝし、ミぎりにはふと村したに見え、

海上の眺望ひんがしミむなミにむかひていとよろし、
鍋坂をこゆるあつさもわすられて

すゝしく休む峯の松かけ
此坂をくだりてふとむらあり、この浜辺をとをりて、

物いふもき、へざりけり村の名の
ふとの浜辺のしら浪の音^{なみ}

これよりのぼりゝゝて瀬平坂の峠をなんこゆ、これをく

だれは坂のなかば、したのかたへ誰人の仕業なりけむ、
道のかたへなる石のなミよきに、

あつさ猶まさる野坂や蟬の声
とかいつけたり、皆人立と、まり打笑ミてそとをりける、

これをくだり村あり、浜辺つたひ行て坂をたかくのほり
くたれは、宮の浦となんいへり、此所浜辺づたひゆきて、

これより鶴戸山の坂へかゝり、左りに建山と見へて杉山
あり、此あたりけわしき坂を登りしばし休ミて、これよ

りハなたらかなる山の腰を稍遠くゆきて、日も照りまさ
りぬれば、あつさハなかゝいふへくもあらず、かたへ

を見れば地藏水と石ぶミしてしるせるあり、鶴戸山の坂
へかゝりてより此所へなむきたりつれと、水ある所なく

て、此水もいとほしくハあれと、あたりに見えねは、稍
谷なんど下りくだりてもありなむもはかられねば、こは

あつさの種なむめりと、爰をわつか行けは茶屋ありと、
此所へ休らいて水ものミてなんと行過ぬ、かの茶屋ある

所へ行かゝれば、さてあきれたりや、焼けうせて柱のミ
もへきりのこれり、

この宿のやけてのんともこかれけり

たちやすらへるかたしなけれは

しかあれと草の原いわかどなんどへしばしやすらへハ、
 風ハ吹けと木かけもなくて、あつさハなをいやまさりて
 覚ゆ、皆腹もひくくとなれば、爰にて飯つかへるもあ
 れと、水にたにけれは、はや先へ行てよとおのれ立ゆ
 けは、ふたりミたりハつきしたかへり、これより坂をの
 ほりて、とびか峯とかいひしと聞し、そより山をはる
 くくと拵下れハ人数多^{あまた}さわげ声あり、いかならむとお
 もひしに、はや飴売出かけて帰りの人々をあちらこちら
 へ五六人計づ、取かけて、飴かい給へくとてせめける
 ところなんあんめり、あとよりハまたうらでハきかむと
 はせつゞくもあり、こはひと筋道にして、殊更に淡島の
 飴売よりはひとせりも多く、殊にはけしきやうになむあ
 れと、行人にはなんといへるものもなけれと、いまのあ
 りさまを見れば、のがる、人独りもなかるへし、こは帰
 りにはいかなるせめにあわんもはかられすと口ずさミ、
 打笑ひつ、語ろふてそ通りける、この所より僅坂をのほ
 れハ辻堂あり、また坂をくたればこ、ら左り右り僧坊と
 もなミたてり、これより仁王門を通りて仁護^{王脱カ}国寺あり、

裏門より表門へ出て岩のかたへを通り、板橋を涉りて坂

をくたれば、窟の内鵜戸六社大権現の御社あり、いとき
 らくしく、めもか、やくはかりなり、ふしおかミつ、

うこきなきいわをのしたに幾千代の

末もはるけき神の御社

窟の内あちらこちら見めくれハ、竜宮献納の釣かねあり、
 いか、して奉りけむものや、はたちいさき宮なんとあま
 たあり、この窟をいて、いとめつらかなるハ、いとたく
 ひなき所になむあれハ、図してかへらなむものしたり、
 はた下の巖石荒浪打ましわりていかむともいひかたし、

打寄て浪もくたくるひ、きあり

千代ます神のしたの巖に

なんと口ずさミて、かへりに寺へまかりなは、縁記・絵
 図なんともあらん事をおもひてまかりき、しに、ミなあ
 りつれば御札・縁記・絵図なんといた、きぬ、この窟の
 権現へ詣つる道はいとよくひろくして、橋なんともおち
 おそるへうもあらねと、こ、ろさまよからむ女なんどは、
 この橋へ行か、りて涉り得んひと時おりにある事と聞し
 か、けふまのあたりにか、る事を見つ、飢肥城下ちかく

殿所村といへる所の庄屋の嫁なるよし、年の比十八とか
にてみめかたちうるハしきものなるか、わざと詣もみなんど
はるく遠く尋来て、既に橋へ行か、り、いかにとして
も渉る事かなはで、いともよはりつ、空敷ぞかへりける、
まこと恐ある事にぞ、してわがつれハ爰をかへらむと、
もとこし道を行て辻堂ある所を通り坂をくだらむとすれ
ハ、あまたの乙女子まぢかまへ列をなしてそ居たりける、
そがなかを左もあらむさまにて通れば、飴かい給へと独
りす、ミよると、ひとしくとろくとかけいでたりけれ
は、いまはせんかたなく木履はきながら坂をくだらむと
いそぎぬれば、かのやつばらハ皆はだしにていと早きゆ
へ、のがさす袂をとらへひかへたり、後をかへり見れば、
供なる鮫島へもあまたとりかけたければ、さまぐい
ひしのけどもゆるさず、顔の色朱よりもあかく見えたる
もおかし、おのれへすがりしもゆるさむさまなれば、は
やかいたらむそよからめとあまたかいて鮫島へもたせつ
れは、其時に鮫島もゆるしつ、またいくらともなくほか
のものとりつかむとすれと、いまあまたかいたり、この
上は用ないといひつれば皆き、わけぬ、終りに独りいと

いとふ呼かくるあれと、坂もくだりきり道もよければ、
せかぎりに走り行けば、寺師ぬしなど早き人々先へや
どりをもとめてなんいられぬ、かの乙女等ハ付添ひ、は
せつゝいていとくせめけり、きけハこれ等は寺師ぬし
をはじめ、早き人々へひと度は飴をうりきりて、また取
りにかへりせむるものにぞありける、さまぐいひての
ちにはかの飴を座中へなけこむでうらむとすれと、皆お
ふくかひたれハそのま、置しにとりてかへりぬ、此里を
ふけいの里となむいひつ、こゝにて飯ともつかい、程な
く浜辺づたひゆき、また田面づたひ行て小ふけいの里あ
り、そよりしばし田面づたひ行て坂へかゝる、この坂の
高さこと、空にのほるべうなる覚へていとさかしかりし
ハ、きのふな、とふげの坂よりハ中々まさりてなやめり、
のぼりくゝてのぼりはてたるところに、石に多りたる観
音を安置してひとつの鳥居あり、鳥居峠となむいひし、
むかふところ島々多くめのまへにあざくと見渡された
るけしき、えもいわれぬ眺望なり、あらまし図どりに隙
どれり、若き輩ハ此谷へ石を転ばし興しつるもおかし、
いざ出立ゆかむとするに、独りの僧むかふより坂をのほ

りきぬ、是より城下いかほどかあらなんとへは、わづかに二里ばかりありて、暮ぬ間に行つきなるといひし、さらばいそきなんとて是よりハやすろふ事もなく行程に、あやなくも道まよひて涉りなき川へ出づ、こはいかゞはせんとあたりの人へとへは、川がしらのかたへ涉しあり、此所へ行てよといひし、さらばとて川測づたひ細道をたどりて八町ばかりあとへかへり、涉りをもとめて舟ののり、川をわたり此所より城下へゆく、此あたり千町田を通り、また坂へかゝりくだれハ程なく城下なり、この坂をゆふつがたに通れハ鐘の音聞ゆる故、まだはやけれど六ツの鐘やと此地より道づれのものへとへば、入相の鐘となむいへは、

暮ぬ間に行かむとそおもふ旅人の

こゝろそいそく入相の鐘

して暮々に飢肥の城下町玉屋栄助所へやどりををもとむ、

薩摩問屋なりとぞ、今宵二階へ住めり、

三日、明かた空かき曇りておりく雨降きぬれと、肌寒くして西風雲を払へは、後は霽尽なむとて、けふハ榎原大権現へもふでなむと、扱けふハかるきうへにも軽く出

立てよと、脇差ひとつさしこむて菅笠か、けてなむ、巳の刻はかりより打立ぬ、宿せしかたより南西をさしてゆけは、町の出はづれより武士小路あり、皆釜土壁にして上はわらもでふきたり、このあたり童子の袴羽織もきす、脇差一ツさして書物のつゝミたるを持たるにあまたあへり、ミな学館へ出るやうなり、そかなかに独りハまち高ねづミ染のむちさし羽織を着し、大鬢にして年の比やうく十五ばかりにもなりたらむちいさきかたおなし書物を持って逢ぬ、我里なればはや勤にも出なむ比にしあれと、外に年とりたる勤にも出そふの人にはおふ事もなく田面つたひ行は、いまこのあたり茶摘ちやかの最中と見えて男おんなおりくゆくを見かけたり、坂をひとつこへて涉しをわたり、また橋をわたり行は、このところよりミぎりハ本道、左りハちかミちとなむ、本道をミれば中々たかき坂見へて、ちかミちハ坂ハなけれど、まがひ道はおふきのよしなれと、坂道ハこれまで飽まで登りたればまがひ路はたづねくてゆかましと、ちか路のかたさして行は、誠しまがひ路おふけれど、これへ走寄りかれへ走寄り、行かふ人々へもしけく問たづねて行ぬればまがふ

事もなく行つれと、あちらこちらくどくしき道にしあれは、やう／＼にゆきつきて町あり、町のむかふ鳥居あり、桜井大権現とあり、そより二階造りにしてあけにぬり、いとふとき(七カ)二王門をとおり、右のかたへ桜井の宮、その奥に榎原の宮、いつれもきらびやかなれと、桜井の宮はあかゝねがわらにしてミなあけにぬり、たるき先ハめつきかなものいと／＼か、やきわたれり、絵間あり、寺あり、詣人もおふくうるをへるさまなり、二宮ともに詣てたれは、いざかへらむとしてかの町へしばしやすらひ飯とも給へ、ほどなくかへり路にむかふ、こたひは本道をかへらなむと行は、おもひもかけぬよき道にて、殊に高ミなれは涼しくして、あまり速きやうにもなくて、暮かゝる比なむ、今朝立し玉屋かやどりにつき、こよひも此所へなむやどりぬ、

四日、けふも空晴ていと照りまさりぬ、辰の刻過る比なむ、玉屋かやとりを立て千町田つたひ行ハ、郷の原・上郷の原なむといふ里あり、またなまつくらとかいへるちいさなる里あり、このあたりまで二里はかり、千町田つたひ坂なんと越て行、そよりは高き坂へかゝり、稍高く

のほりて一ツの茶屋あり、此所にて皆そばなんとたべてしばし休ミ行、道を望めは岡高き事雲に聳て、なミ松見ゆるハさながら竜のめくりのぼるか如し、かくとしもいづれにゆかでなむといま見えしかきりのぼれハ、また今のやう雲に聳る事、幾度となく拳のほりて峠にしばし休ミ、又下りに、それよりハ下りのほり幾つとはかぞへもはてずして山がりやへつきぬ、此所関守あり、番せる所へハ九曜の星の紋所染出したる幕引廻し、鉄炮などかざりていかめしく見へたり、往来出してとをる、そより新道の茶屋へやすらひて飯ともたべ、そより行ほどのほりくたりのミなり、茶屋あるところへ来てやすらへは、老ほれたる女ひとりおれり、ざれ事に、はやけふも暮かゝればこゝにやどらましといへは、宿つくる事はかなはずといふ、いかなれバといへは、米なしといひし、実に米のありそふには見えさりき、くひものなんどはいも・麦にてもよからめと、既にくれか、ればと打わらへハ、なにのいらへもなくぞ居たりける、いざかくしては誠し日も暮なむと立行は、行ほと坂道のぼりおりのミにしてなか／＼なやめり、飢肥領は五十町一里のよしなれ

は、遠き事一里ハ二里にかけあへり、坂をおりくだりて田面などありて、山のかたかけへ人里も見へぬれば、これなむ清武といえる所ならむ、町も遠くハあらしとよろこひ行けは、また高き坂をのぼり遠く行て清武の永田町へ出づ、これより田面を十町ばかり行て新町へ出、薩州問屋矢野正兵衛所へ暮かたにつきぬ、今宵此所へやどる、

五日、けふもつゞきて空晴たり、辰の刻過る比なん、矢野のやどりを立てかへり路にかゝり、ちいさなる小坂をのほりければ、このあたり土屋敷などあまた見へて、飢肥侯の蔵屋敷とやらあり、また清武の地頭の飯館なりとて敷台などありて重々と仕立たり、こゝをすぎ田面へいで、また小坂をのぼり尾筋くだり行て田面づたひ行、飢肥領境の塚あり、これをすぎ、茶屋へしばし休む、この所にてきく、飢肥田野といえる所へ、いまあらたに辺路の番所を営むとなん、此茶屋より田面づたひ行て中村の町へ出ぬ、此所薩摩屋へしばし休めは、あるし莊作なるもの酒肴など出し、其身はちかき比よりやまゐにふし居ぬれば、弟とやらにて出ぬ、身すからの旅路なにお

くるへうもあらねは、こかねなむどあたへおきぬ、して御手山御囲場猪俣ぬしの館へまかりぬれば、風呂などわかしおかれて、飯なんともてなされぬ、して皆舟に打のりて赤江の川しも棹さし下りて浜へあがり、見えしかきりあらましの絵図なんどのしぬ、またうつせ貝なんどひろひて、おさな子のつとになむせまじとせしもあり、此所はしばしにて、また舟にのりかへらむとすれば、帆かけてのぼらむとする御手山の船二艘おれり、これには(牽力)さまれ率れてのぼれば、矢をいるにそ似たりけるか、はや御囲場へ帰帆して、ほとなく勘場見にとて立出たるかたもあるか、年若き輩は名のミして、此所上の町は戲女の伏士なれば、かの所へ足とゞまりしとなむ、やつかれも行て然らむやとき、しかと、人々めあてにしなる職務の身なれば、いまやつれの旅の辺地とはいえと、まづゆかてなむと、

糸桜いともてひけとひかれすよ

おもきをになひ行身なりせは

といひつ、もの淋しく居残りしに、御手山材木支配せし山本藤助三弟猪八といへるもの居りしか、酒肴なんども

てなして興しぬれハ、あるしハやかてかへられぬ、やつ
かれのむかひとし、これまでこし倉岡暖坂元なるものな
むど打よりミき波かわし、稍時を移し亥の刻ばかりにこ
の館へふせりぬ、

六日、けふも空晴、卯の刻起出ぬれは、あるし猪俣ぬし
辰の刻ばかりよりはヤミき取はやされ、しばしして飯と
も給、かへらなむと門立出て舟にのらむとすれと、上の
町ひと通りして、きのふの花のいろに出たる匂ひかふば
しきを見もせずして行過なむも余りに意なきよと、あゆ
ミをかなたへむくれは、けふはまだはやければ、ねくた
れ髪のみ、にしあれと残りなく見て、なにくれともの語
りなんとしてこゝをすぐるもおかし、これよりは田面を
遠く通りにて江平村あり、これをまた過て神武天皇の御社
へもふつ、まへはやふさめの馬場と見えしあり、これよ
り川の方へさがりて天皇舟つけ給ひし所石ふみなむどあ
りときけどゆかず、そより景清のつかにもふづ、此所大
師の石像高さ一尺五寸計なるを、人々祈願のよしにて五
六十もたてならべり、その首ベミな落失せてけり、清正
信仰のものきてこれを落せりといふ、いかなるゆへむに

かあるらん、そより十町はかり行て舟より川をのほり、
未の刻過る比倉岡へつきぬ、役目の人々川のほとりにい
て、待ぬ、吉井なるものあなひして飯屋へつきぬ、今宵
は延岡領の飛地大瀬町へ狂言ありつるよしにて、よき折
なればやつれ行て見らむやとき、しかと、供人ばかりや
りて独り留守に居りぬ、下べ市之丞なるものは、ねむた
くて内へ居残りふしたるぞよからむといひて残るもおか
し、今宵はいとく淋しく、殊更に旅のつかれもあれば、
戌の刻はかりも待へずして臥ぬ、今宵狂言のありつる大
瀬町は、もと町のありたる所なるよし、いま八町ハなく
在にしあるとなむ、

七日、けふも空つゞきて晴たり、朝とくより鎗・つるき
なむとの業を見て、巳の刻倉岡を立て、午の刻に高岡の
飯屋へかへりつきぬ、菅笠おつ取出しよりけふまで雨に
もあはてかへりつきしハなによりも嬉しとて、

菅笠のひとつにしすむこの旅は

鵜戸のめくミといふへかりけり

時敏

御縁記

日州鵜戸山略縁記

抑当山大権現ハ、地神の第一天照大神を始奉り人王の最
 初神武天皇に至るまで、六はしらの御神御鎮座の靈窟に
 して、中相殿ハ大日靈貴尊・天恩穗耳尊、左相殿ハ彦瓊
 瓊杵尊・彦火火出見尊、右相殿ハ鷓鴣草葺不合尊・神日
 本磐余彦尊なり、人王十代崇神天皇御宇、六柱の御神を
 三社の宮殿に移し奉り、鵜戸六社大権現と号し奉る、然

るに神武天皇一千有余年の後、人王三十四代推古天皇の
 御宇、聖徳太子百済国の産大仁位、鞍作鳥仏工精作の六
 観音を安置し、六社大権現の御本地として鵜戸山観世音
 院仁王護国寺と称したもふ、凡当山窟の儀ハ天地開闢の
 根元、国土出生最初出現の靈窟にして、鷓鴣草葺不合
 尊・神日本磐余彦尊御二神ハ此岩窟にて御誕生座とかや
 謹んで其由来を尋ね奉るに、地神第四の皇帝彦火々出見
 尊所以有りて竜宮城に幸し給へバ、竜神豊玉彦玲瓏たる
 宮殿に八重畳を敷、錦のしとねをもふけて尊を仰き奉り
 もてなし給ふ、御女豊玉姫を皇后とし給ふて既に三年を
 経給ひ、尊古郷に帰りたまわん事をみことりし給へバ、
 竜神一尋の鰐に馭奉り、豊玉姫に干珠・満珠の二ツの玉
 添へて鵜戸の窟に帰り給ふ、御阿爺彦瓊々杵尊悦び給ひ
 て鵜の羽にて産屋もふ、(けりカ) いまだ葺もおはらざるに皇
 子あれまし給ふ、御名を彦波瀲武鷓鴣草葺不合尊と申奉
 る、御産の安かりしをそのま、名付け奉る、是によりて
 今の世、産舎に鵜の羽をさして置く事、此時よりの縁な
 り、豊玉姫出見尊に申させたまひけるハ、妾産舎になや
 める内、我をも児をもかたく見そなはせ給ふなど誓ひ給

ふ、尊聴しめさず、ひそかにのぞきミ給へハ、世の常ならぬ御すがたにて甚だ驚かせ慙しく思召けん、親昵の情なしとて御乳を窟にふりそ、ぎ、海神の宮に帰り給ふ、尊ハ悔ミ悲ミ給ひて御名残の御詠歌を送りて別れ給ふ、皇子君にハかりに他女を用りて乳飴を製りてひたし給ふ、御乳石とて窟に出るなり、又鞆戸の乳飴とい、伝るも此縁なるべし、かくて豊玉姫の御返歌を玉依姫に添へて送り奉り給ふ、鸕鷀草葺不合尊御成長の上、玉依姫を皇后に定め給ひて地神五代の天が下をしろしめし、彦五瀬尊・稲飯々尊・三毛入野々尊・磐余彦尊あれまし給ふ、古記ニ曰、神日本磐余彦尊御歳十五歳にして太子の御位に立給ふ、諡号を神武天皇と称し奉る、天か下を治め給ふとき一基の草堂を建たもふ、今の方丈仁王護国寺是なり、然れハ則万代のすゑ今に至るまで、到詣勸礼の人たゆる事なし、神験目をおどろかし靈感耳に盈り、宜成かな、勸請の神祇ハ講経に随喜を増し、来臨の宜衆ハ法施に威光を添たもふならん、幾千歳を経るといへども国家鎮護の冥応弥深く、拔苦与楽の慈眼益広し、所願を満て五穀を成就し、国豊かに民淳く、世々久しからんことぞ、

寔にこれ当社大権現の威光ならんや、尚神道の奥秘ハ凡流の輒すく伝へ知るべきにあらず、かるがゆへに万の一を記て余は略て畢、

〔朱書〕
「名越時敏」

鹿児島県史料編さん関係者

史料編さん 東京大学 榎原雅治
顧問 史料編纂所所長

国立歴史民俗博物館元館長 宮地正人

鹿児島大学名誉教授 五味克夫

九州大学名誉教授 安藤保

委員 原口泉 晋藤哲哉

三木靖 日隈正守

宮下満郎 塩満郁夫

堂満幸子

鹿児島県歴史資料センター黎明館

館長 高山大作

副館長 小蘭一哉

調査史料室 内倉昭文

学芸専門員 崎山健文

資料調査 梶ヶ山梨沙

編集員 中野尚子

堀田未希

村黒川智世

鹿児島県史料

二 史料 敏時越名

平成24年3月2日発行

非売品

編集 鹿児島県歴史資料センター黎明館

発行 鹿児島県

印刷所 株式会社 きょうせい